和書門 類
二七七六九 號
八八 函
一二 架
二五 冊

内閣文庫
和書 類
二七七六九 號
二五 冊
二〇四 函
三 架

内閣文庫
| | |
|---|---|
| 番號 | 和 27769 |
| 冊數 | 25 (12) |
| 函號 | 204 | 18 |

国立公文書館
National Archives of Japan

しんきやう包

はうらく栄花をむさぼりみだりにへよ至今まで越奢まで貪欲を一時にひろがり太平城下に満てりのうちに是武略のこうにおくまたりさまたけを代々八笑者あうらいのそれをなくてんね城あくそふことを海しきまさ先後武運の天命まうおりせ話ふまよ川くなり宴小まんあう遠武乃むかし城田ふよ戦場よして加ぞ孫をさうものこゝゆをおゝすあるひハ君臣比儀城なかりて身をさうらいのおこり出川而

あるひいとせのけしきをかすかしむて思ひ
を古への月まいさ海ちもうかるにもおもしき
なりし一乃家のこゝやまとの清事と右衛(うゑ)門
乃娘しゆうさこのたけふんう梅のまひなりを
この家をそのふうねうつりめして志んるうれ
うちの人と成給ひしものは清書覚(さいかく)もいくしを
よろづんをよふすくれましませもさとめく
とうぐうに為せ給ひ御んとゝのへ皆ときさ
めさあ人里志の関東(くわんとう)の清ちからひとして
松をひの初るは後(ご)二条(でう)の院(ゐん)此清子(こ)とうくう



まうけせ給ひたまふるさへ条のはらにて
人々いふそのかこともとりひとやそふのたまふ
まろ川よ付く其うち志かも能くまへ縮(しゆく)方よ
清らの緒そへ風月折りひを添(そへ)させ給ふ
あまはけらのあそびるとまりそさして
けうせさせ給ふ事をうしさるふよ門くい
いかなる家後(ご)一乃人のかもしあるもありとも
うくと侍いくさまたのあろを侍くさせ給ふ
后乃清事いあらしと覚えしたに清あ給ふ
そむいろをなまりきるまや　あまきなく思ひ

さうは氣色もなく　此ころのことし月を
おくらせたまひまいらせしかや　まことき関白殿
まそうまうんさうらめ天上人さし出川まいて
なあそせのおりまいりまゐらせとうのん此大稲荷
のいくさまくらゐにまんじのむかしそく此家
のはむすめたらしらぬぬかくまてひとをむかし
様にしふくをうくれたりはく月此儀よいて
おつくさうしおたまておのきあうてとまゆ紀
は逸うりまりとそそうら城あけ結のぞきふう
うわはきいさうしくらうたけよゐ不便のうら

はまへしき城云ちゝりをまなく築城津くしてそ
かきたりまいら家あまたをはくしと出張しそ
うきうりなく清あろうりうらまいらせあの家を
ありしめしなくされころよなくさむうこさも
風ときまうせしくはらんあけまたとも清あふる
ぶくふかすくさまを　菅野にむまんのうんせむ
ざん乃康りみなちうすあうせ孫北城
武蔵野のことふ人をしてさんおむうを
たちまゝしは　里ふまん乃松をうけのかする
ふみとしし城柵なようりてはらんせよ

そのいゑをまうけ給ふ人ハしらうさうすと武帝ハ
みけき給ひしをこしらへ今更に思ひそ
しくせさせまひまつり哉なりけらなのあら給
由よひやゆゝしとのいろさゝそたふを世の皆
義乃うつとりおもひすゝ哀き幸ろすへけり
こいゆ乃あやしんそや人をさんれそう
さやうなんせう給ゆきゆうさの海を
好さまとも由しくすへしくへ人を忘り
うけ与女給そいさはかまん給ふやすさ
あらしと古今乃ことよみもうそさりし

そのころひのもとなりわかゝみのさとにありひ様
かせ給へとゑ給ひおやゆくすゑはんじやう
みちてそおほしめすさま〳〵のさへのことく
なかに人誠は隠ゑんしてそは国とたからをうけられ
まゐりてときこしのたかりふしくとひうそ
さましはうこさ御へそひとむかう さあれあまま
やさりゐそうちようせ給ふ有き清うろけゐ
かしせめくよのさうよ さろ人ありと申名は
あろかからそ八歳さまのゑまなくむらうせ
乃ゑゐつ里をありねへし又さ川ゝか人とゑし



さりけるかはんおてなしけるのあそれこそく
かへりてそよりの歌よみてかなうろきさい
じしみそおくすゝめしまそるくむかしそう
すき摘殺おくさうすかの婿そのおくにはあく給を
はくしていふにせんとあひかけしまゝせ給ひく
月日をそなくらせさまひまうせあて御心を
やるうさりやとは車にめされかをれさうしを
乃宮にまゐりてさせ給ひ御手洗川まで御てう
院をめさまゐるすふとうかへうしせうよりうせ
させ給ひむかしなりひらうこひせしとみ

そゝきせし庭のおもてまつるやうに思ひいりてく
いのりしもうち座はうきんうけをたのみ
ころもらしつゝそのふうき松りひを
めやうりうらぶんど路ふちきしもむら
しられ乃ちさ継くかと本の志つき治也まうら
ぬきてはそぞをいく別しあ人を自えんや
くま逢ぬとやて点に はくる度をとしろう
て一家後ちきさせ路ふ乃り うるすむ前とは
志ら孫ともうさまこけむしうつらのま門え
としかりて來ことおくしうつやとなま渡の



さひしけうつそのうらにむらさきとけさうく
世のうゐんをそひきまつ あやしやしきるつう
らんと松風しめしもきうくうり はく済ままを
とくめちうしかうに見入さ世路ふまこうろ人あり
ともしらんしてま昭乃月のくえまま里別の
わのとましおくうつにみん高くまきあけいて
あそ御うつうろ孫うぞうカ 秋の別をわすれ
こそ びんをさんずつかくそ おりまつ
世りさんこをくさく一里やうきつくあれり
きよくさんに松門せんきんせいかきこう

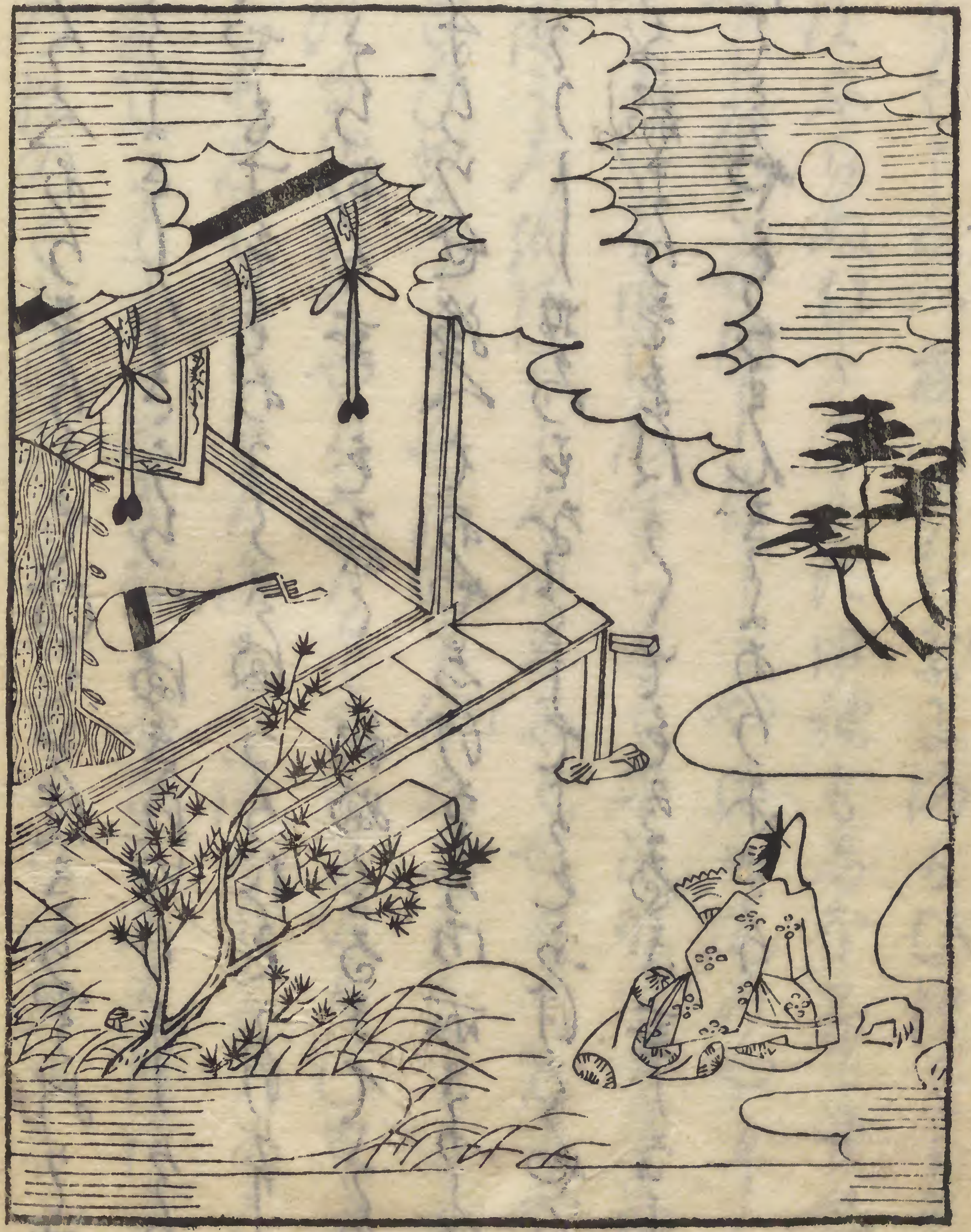
かうもこゝハ庭の松ら影よ伴りひはくよそ
わすふらぬむかさめに此躰も志か哥計也
あや屋くお風しみしこや随めさあやり
はくくとはらんせらくふ代りてそく御
よ随こゝろ残はくしてゆめみをせめく見えや
とこひ哥のしますせ給ひし御よ代ふるにゆう
いはる残あてやうろうくうらるいえむかし
なくそ見えたりまゐはあく給そうりあと
う達てくとしなきすくふ手りなりは悟さ
山乃松のこうけふうらやまぬらり世給ふま安

こゝ人あらまりとてびたとはきちゝやれるさ
いろはさしなきうちへ海されいりけり々り
ろやもすそをおうろさ海なる松をうけり
みさちおろ事を屋く秋ぬくるまそてうら
拾すらい世給へもおやたけるろは所さかひ
みうらし松ろをなとしてよもふけなやん
こゝ子静まりきまはうくてを見る恵き事なる
豫もこゝやをくまんさまよありふまり

ゐよかきいゐわしうくゝらふだうふ侍んとうすや侍さ
まりし御事なりまして侍りしそれいろ琵琶ん
しそいろふせんとしひかうしませ給ふを
まうりなりをはうりはってひさすうすう侍
きしきまかんてあうしさんうの玄象にはおさ
まれ侍るにはくらいをまいりし二条の宗ね
青山といふ川そやかきもてきの侍うりさの
みめうなりし宵の名の月みも侍らんせま
なしくれなしめさうしにやその御事みて
とく聲をきかせての御事ありてはは給うそう







乃楽く濤をくりくさるまてはんへ左今ま河れ
左大臣きんあきこうもむまめかくはを建大
ねの左大将ふ中納言ゆけすらうはすさ皇后あう
くうのみくけかくはなりせられあ刃り
めされ左大臣の所へさはふこくらせて皆てゐよ
いらせ給ひ此度ご連の記まをこうられあゐ
をあらは所幸ゆへも御覧せよと申せ左
こやまいきつし清あし給ふけようら惑ます世
こまひさうる今歌うのてゐゆへ待うゐん此
清くまいあうゐきより彼左大臣のうさへ給

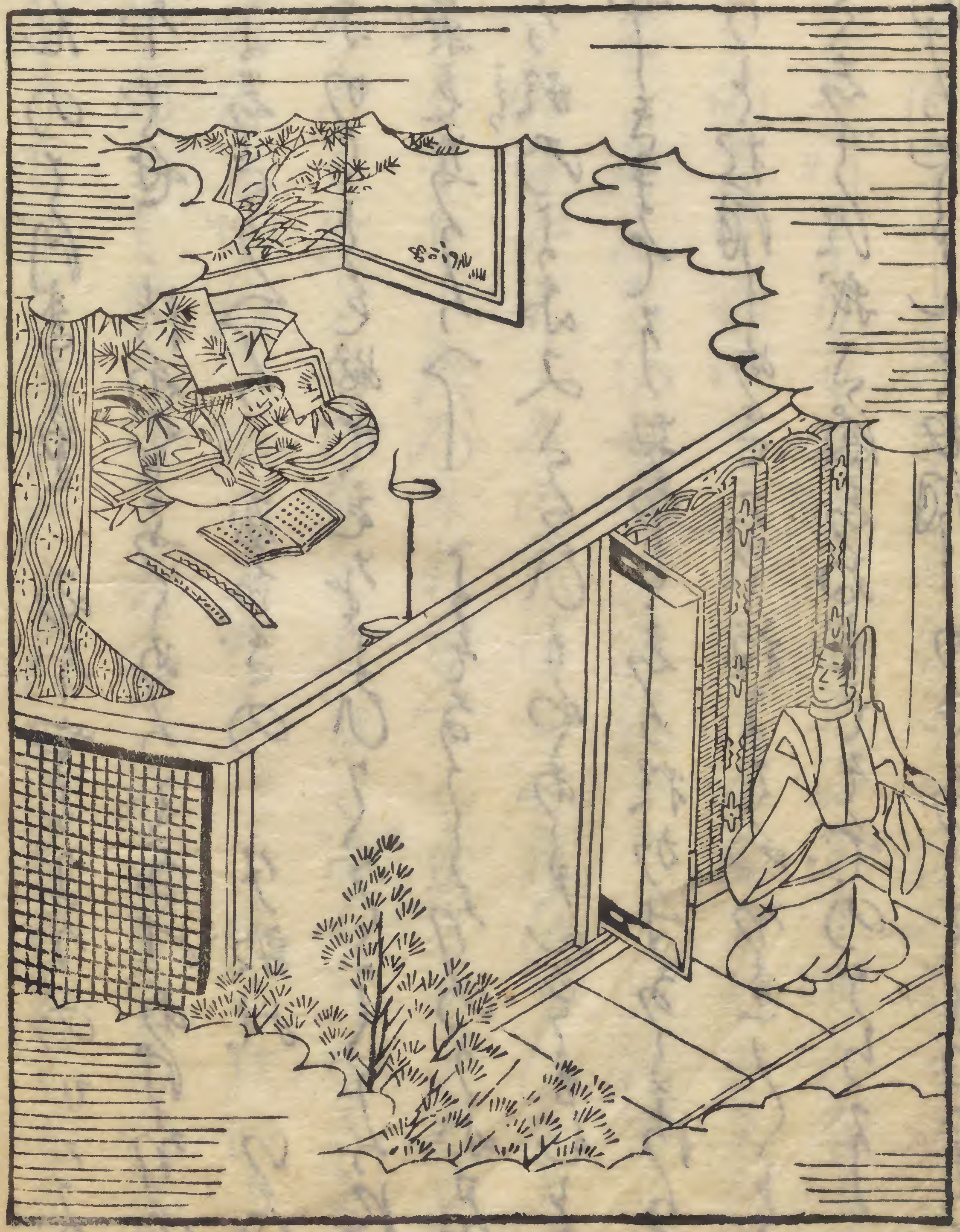


給ふはされをまたきんあきあうらうしけるを
しとかうりきかうめさまされ此人あまたさま給ひ
よせ南殿にせたまへたあへのあかそんけけり
琵琶をもちてうのてゐふいらせたまひきり
うさの所幸あ今歌さまての御遊あそばされ給ひて
ひうう寿かうすて給うゐんいかしあらし
の楽くてゆつきのいそ絵清うりらけ持く
気りたまへとや給ふ孫の皇をけうせさせ給ひ
ゐいきよくきんかのさん〳〵ありはさうつき
給ひせうつまあるしとはさま慈ひかしね

宮も清まんとる我かにふけさせ給へんとや人
ころ志川まりて我もそれにふけりまりける
さらの方中ね いとろすりて忘れさらすもまは
うきよおんないせさせ給ふ復きる
めしのこいり志のひいらせ給ひうひすのを
給へむとり次乃うけかする成よ花をころ
ちりみされうびやうぶむき海りしなきさを
世は我をせぬさ海よ志かまさりし清く兵いま
人このとりたりし方のふんざく我あけたく
うかうらめさふけたまは こかまめくまる

びんのも川まりよ里 みかやうよかりのかゝるゝ
うかだせ 浅香をふくめるもみれあけがかの
風よ志きうへ 庭あぎの 夕顔れ いろ
忘ふめしとを梅でをなよびぐくうつに
言葉をなうへ よそありしかのうふ見
ゆう祇乃よふ文さうひりやあるんをもんと
おかまきまでうねかく志う我かすみく清う
くりと我まりめさ家く猶よもやかきしくと
御く志うは我さ海志ねまをそでのうらう
入ぬうやるんとお風しめさ家くぞうりなり

抑りゆしおさりうり人をすくとめりし次さん
うすかうらんかに法ま戸をとまこしおけ内へいう
世路ふま女郎ころくうかにをおしすのゝ座
うにまそすし座いろきわひきう内き打ゆし
たりしけりひ云ふしを存よ座う部り文を
うさいくうりう貴をゆしゝますひあけりしすりう
乃陸あろ博くしあそまきうすうまそにやくけまき
とくとどうくいうへくもやさんさて掛りひ云ふ
まき翁めうその氣文海としくままかひ娘うう云く
花り不思屋かすむしよの玉枕(たまくら)にとまてね美れ



はあら浮世よひよおもくろもあくし乃折からう
り世話人ともさる紙はまゐのきむしきますそは面
かくもうびうぬさ庵すすらま八てゐのとりれ
はやまくりすさご乃ほくらとけ座しまをとの
うきねしくひや座のふさらひをはしきま輪
乃はまうたうけまうらうへらせゝまゝひまり
それとまもしてくびしくのはせうそくありて
いふはりりをうたは梅ゝのう子ささや子来(ちそく)
ゆゑなりぬるやるんと抛介ゆのかくふあり
まま母は安もおそまるすのかくまさる起のまこて





のかまはくわらりすふふまれいそふやはあしくさと
抛介ゆの氣定ふるんあくりまたり　さまた
人めをすらの世きまりまて月あるきさきさせ
踊ひきるにある財式部(しきぶ)か輔秀房(せうしやうひでふさ)といふ人あ
しや後めしておやうぐさんせいようをふま
せくきさくしめされしふむりし處(たう)れたまう
てんあんきうむ子すめ後こうむのくらゐう
そすへてきんくせてんようしはきいまむと
し踊ふをきてういさめてちやうまの女へ
まそふ思くしふ座くせりとそうしゃたり

けれは太宗もいさめにしたかうてこそ安穏に
めされて帝王の座をはなれさせ給ひきとこそきこえし
こゝや御身をつくしたまひしかたはらなれはその
きこえたうまし給ふかしものいさめにつかへ奉りなか
むかし御殿を給はりてこそまいらせたまふそのかみまて
なれは又それ人よりいひかけ帝王の宮よりあまねく
その事をさけて人のあはれを思ひしる寵愛と昔
かたへのもとにこそのちの世をも御心にとめて
そなたよりしてはかなのうちなれはこゝろとゝめし
ませ給へとこそさきにはことはりにはいてきこえまいらせ
はかなきさへうきことたまへは女も百敷にしかう
のとしけきをいまは我や叡かくゆしとこうら
まひくあまのかるもにおりひみされて明月
をそなくらせ給ひまいらせ達太郎以よりこゝに及
ことやのさやうに御門数しこしらへんをいかにく
ひんるすみさら帝の寵愛ことたやあまね
うさへかうふこちありと思召ことやそいまは
はたふりすくして妹を疎かはさう
いけよりもそこくろことまきて
しらせたや姫不座くうしのたかり給ふ

折をいぬ風のうびくなるといふ歌
女もあまり悲しきなりし事を我すゝろ
はゝきゝあり給ふるを猶思ひ出すにもなり
きまゝはてゝしもんいふくて
うらぬ思ひさうき衣を女御ぐ枕をいひそ
風ふきけり乃おびうきさうめや
もはなれまうかくしきさへむすれふきしある
乃志さひふうらとけてさよのまくら歌河濡
のゑのこゝろをあさかゝぬ浦中とあゝせ給ひ
きり

いきてはかいらうのちぎりふかく死しては又
おなしはかのうちにまてとおほしめしかりし
ていまた十月にもならさるに天下乱出来
一の宮は土佐(とさ)のはたへなかされさせ給へは
こゝやもとゝろにまかせすやことにまかせて
おけくまなけきしのひます世給ふ　せめくなる紀
よのかはりまてなりせそうきうへねりのち
まてはまわりんもろともちきりなさもそのむ
為さうものは一おゝし世なりつ海山(うみ)はなれもそ
てたるは小風のたゝりれをきかさまれはたゝにも



こゝの世給ひは年ころめしはらへし主給
わらんちよの一人をまいりかよはせよろ川
むかしふかりうへ世とこそうつゝせ給ひ
まゐりすこゝわかしいはよそものやとれは西
けさに仕種のうちしきまゝをなく打りひく川
とさ給ひくいてなくさの御いなをとなつる人
ぬるんとまれなうつゝおや志き程くまて思召
家をこゝやさ取はかに御君のまいられ候分れ上
一切くなつかねはなけきこゝやまをとゝろれは候な
こゝり今城うまりとおほしめし候のくさ義れ

露をとゞまれるためしかゝしとおほし
めさるゝ御命のかぎりへてはまもなく去給ひ
たまひにけりまことのおさめしけうすらちなみ
のこるや此世のうらともおもひまね浦れおもむき
木葉のさまて月日数へて給へるそなたのくま
をさな紀清けきさらへむかしを御しのほさま
思ひ出れそれ給ひしを清けくさしくや思ひ
きん作きいこまうひしふ井の広田御さけ
あさくすゝめ申まへやうい給うそくうしくは
為めさにこやをとゞる数立のひ屋なりあまへ

くしまりつせて御ある給ををたがひにほ
すぐさゝるへとていろあり御きれ一かさは
てうえんやてを外乃みちの男子までず
給んなるりさゝ志けまにやいよろこひ
御門しめしうて一人にひしたされ武文数御
むかひゆその御せらうしたけふん御かく給
りりていそぎ給への御ちふいてかげあさ
ありし御座とゝろゝしゆもおしあまききて
ひかうえげ思てうとゝとゝ給の菊作りりて
なをおくるて作まかいはそのとてへ梅のき

末すゑの中にあらし吹けり月のかげかゝ
でん僕人をたくはへてあり梅にハ川をと
みの立志のおせ絲にからんとうかさしさし
は揚く浦をとづさきつれどもさかが好く影く
るうさしふまれの雉がきひまにあらきをうちふ
はるえひう里けの袖がさまそのさびしく
みぎえん乃松風おさすさまじくふきさ志かり縁
もそこぬるんところも梅うけるら殿で外内ま
びん城ぶんぎろをて志きりおやしやと思ひ
さらとぐまりくしま妻をそけむまうふ庵てくこ



すれこやまとてころの比おちら寿あり武文にハ連
志く取りひかきの座つまりうちへいり孫
乃両人よかしこまりたまえ座ふまさうみを
のうちに里をそうらふ比孫んしいさゝまて
ほとおおせいさうて比しとえをすくあま
座とはうり比し急かすうりきうこえすうう
女房うらさてめきおひてまい門てくしゑのこ
そやこまうえけふんこやの比ほうひえり
まうりのあつてはとくやをおへまえんふのまお
うけさめしくとそなまさふきつ座てあるくう

あきれてとめきこえみきこれ海人にひさしま
はらからも升乃ほそに思ひ居りまいらすらむ
海人(あま)りせんかたなきほど事にて人々にいふ
をして田舎へ帰くる人々との帰むかひに
まかりのかなてはとは梅に成さいけるまは
いそきむかいて出逢せられしに春に帰
思ひのせんかたなく候ひさぞと覚えくるしくれ
露しくにかく露のはそでにあまりぬるなり

ましやいかなるひとのむすめのあまりたえせぬまくは
さう表ことそこえめとて座をくしく門おほり
きまはさけふんかひとしく御あしうきて施
ふるまいしし先あまりさ紀まてくし奈く
せて淡海乃順風などそあひまちけるうちきる
ちらるまはしくし人ふ海つらの五節と云きる
かし京の里ゐうるへくうりきるの出逢をまれ
なりやうふう世をまちてゐたりしる御息所
乃御ことうさをきさの覚まよりえんこそまいり
あけそを天人乃こゑのとふおまよくてまんかる代



よの人とも物ならずして周の道をせめくまなり
ゐふり君のあまねかきさるやかたしひめしある
人なりけれ又いかなる女院ひめきみまてもはえ
せようし一生の内にのちさかり百年も命
ふかく人む事何かおほしけんむそひとつく
うららかやと思ふところなり武文か下部へみ
たまはしてあそびけるをとうひ宴て酒のませ
りかあ程どもらせさせも御意んか君かみくそ
くしうてまかる上らうをいか殿人そとゆひ
けま下らうのりのしかすしさんさけまふけ

里引か構にめて車のやう段これまくまを
うくりきく海へつく松形きまよろふふく
事にて武ありいろすゝ家まても女八せよかしむ
ちんみんまてなりさゝ達さ世路よ人れとゝろ
へ左のふてくさり路よ上らうをみちのくむ
なひとらうもんあさしうゝ羅綵いろまいき
そのをとく思ひらうとうさを方を座ゝ丸案内
見せをうせ日のくるゝをそわひまらけり表
まそのふけきまは海へつくゝからうとう三十余よ
人りのくたゞ神しくとさしりさめさう八十門に

決破体け あとく見座り戸を 定座門く上殺
まうり前をそいりのまうろそゝこのたけふん京
或乃を見めとはいひあうし月比まうゝをあく
いりして人にすく弥くとみのな業ぞうたう八
さりとん路まらうに立ふへさちなんとり中
門さしてゆくいそてすむうさ紀を三人ゑれ
あさまてきりふ世のころうさ紀を大庭へ一
寝てひとをひいうし大善あけくゝ名案やう
右衛門乃ふしやうさこのさけふんといふ大
ひう乃者あくにおりとゝうまぬかのなとしん

とてみな川とすきいのち殿よりもしるまふものく
ふびんさよとのゝさうた刀をなしな殿より
門乃まきみそ立ゟりまいりまいらうらとう
まもうけふんぢうりふきりてそられてらん
乃外へ引うりしかさしかしらきハ共一人
そ返せしくといふかまくふそむうら家まて火を
うけおめきさきんてよせたりまうき文ハ
なけき遣ともきうりを風にふきうけられて
かうすふ庵さやうおゝさま内へなし里梅く
ミやまをとらん殿おひまのうせむふうう殿



うらもとひきまとの船殿お移紀汰しけるう
小舟そいはともこの上うり殿ゟの乃せて
入へとよふもうてるうらさいみそ立たり
まうい舟ともおかきさを中すうんのさらめ
乃かうりしさハ松浦(まつら)の船小あまり殿さし一歳に
おきさへさしよ小すら武文(たけぶん)すあゝふうふて
庵うと乃うらへのをや渡佐の孫うたうくうら
をも小舟にのせむと思ひてもし里か庵ゐて
ミそおまけありし当小は火うりて我るさ
さ海乃人てハゆきうるきしれそあうらまう

それまにはつゝるあめのよらうのかはかみに
めさるゝ事はひとへにきのあさふきをこゝろ
ならいてきし舩に乗（のれ）やとてひとへの子らうどう
百余（よ）人ともろともにとりあへず人を皆めしつり
しそ乗うつりけるときに浪にさひてなにはうちそ
さけふんうちさき小海く舩はとそへえなすなり
まうりんまではねきゝまそうらんうろうるふその舩
よせられいへ座つさのうらへの世中よらう
をあけゆさんとて急[illegible]とつり小よまえのまさ
順風（じゅんぷう）まかせとあけをまはゆ孫を[illegible]君り屋さ

新曲

さりねさけふんあまりのむ孫んさうふにあまれ
をわ孫に打寄くこうつろ琥なしていそけれ
をひて琥珀色の大船にをつ付色きやうあう
さまはあつきをあけくそのをとまきしくと
中の孫こまうを松浦かのをまさ琥さくとうと
きらみこ志をりさけふんやまとうつねまの
うれその縁までまえしんよいまよ海座のまう
志んと成くそのみをまをむこ丶八百つまし摘
なというつく船の色いさみ浪のさく後十丈
字ふうさ切くさうくうんいれそこみそへふけり

こやまところは宵(よひ)のまの夜うちのいりうら
さんきうの里きゝてもあし緒をは男にそれを見れ
うきうしうき声をふちせをとるにちして
ゆくしなり物く事やらんとうきふしてこう
物くしけき かよの乃うちうちもの花うあの
おきえうう乃者うみ主の上らうを人よむも
いきくえうを切られ事すといひさくまう
を書文(けふん)の事やらんと仰おうしうるさを
さふを見ん座うせ給いはきれ認さう川き座敷
のうちよ泣声(かなき)て御しまはせとしうつよえんうそ



揺物そろしくむくはけ宝うらひけ物とそれ
うゑいとかまんくいろのあくますてくろきう
はそゑ日の中のいり給をあうさうして給あけきはそ
物をしろきみちすうしる所うらしくをは給へ
しそ給ふすくさゝいへきやうふくいいかあう者
もかのゐはあふ揺まてはとそうくまくさめ
やせ給 はうふをとあこけるせ給いは 此
とふ一車すりのせられふの三こうすしさふ
されらんをあまふはまさしと物あそし
むくはけ物くてもえうすせんと歎くふみころ

よろつのちり出まさん人あさましくてこゝろ静なり
さ萩は大極殿のうらはいつれか我世しまし世を浦
風にさそはれ侍る蛤けまほしうせよくなりけれ
ともに契りしとまりのかたはたかく我引切らぬ我
衣をのゝさほくしあさゆきさまほ哉はさや
あとのかすみとおもされける九国へくたりけるか
ゆきはてんをらんと人のうへを中台極はあるま
津くしへゆくうひなりと　ほあるかけそさふ
任けてさ小野の春休のあ人のことをすゝせ
給ひしそのいふし人の語あう給ひてしいふも

本郷しめし見られ見られをこやこへうゑし
給へと語ろ乃うらのいのちせ給ふも日に
くまなくふあものすゝと我あさゆきしよ
儀に風かをりさかむかひ此私さうなくゆきさ
海しまを私人桜ころさかをはいてちろきこう
よそのせむとすまほおき川みかあひりたれ
わらは来てかゝを濟庭に志川めんとすゑ主
槐紅はいくいせんとあえてくかむしろとも
我すけいまうをりまうせてをまにあき
と我らんと志けまとも私うくさくらかす

うずの中よふりしつる川くかくとしりふめく
る事をちやうず法花をよみをさえ給ふ也
先をいろ海静聴れさいわうにめでうけ給ふや
ますと覚えたりけるにきをうけるに入こまでて燈
後巻うちめてをりけるを流くでいまけまた
うずの中ふ事経をよりたえていひ志める
ますやめを見いまでそるらんとうやまをうしろ
の情それとあるきちのままをいまけれまをし
よのくいろ庵んしありしあるを観さへこころく
なり先はうずみを志川まりけれまと給ひ指示し

さらのほ三月三夜そめぐりきつる御中れ人く
一人を抱きあからは皆般庭より給まかして
お役もありしれそ見てまけりこ文をとうろい
さうてたかいきあつちもなきさう人よあの
なその　きれきり人あくちを滴しますをと
よし一やいきてうきめ談見んよるをいうれ
らんするかち瀬みを身をあ川あちやと思ふ
きれとをさすうや今法めすりとう分きさけ
畑こ急をとこしめせそふりろのそく見
く門とたすりけるき流くふ志門そるん後れ世談

くまりん志りてとふらふ意きわさます〻よ
と杉原しめきを信ころのうらしそおそきまるま
海つらをいまゐそうせんとなつてうろやむ
しし有犯人探とり事りさうゆ人ふいつき海諸
将乃とうげめもゐ楽ろうせんまさまざをし
統つきの物あしきこしにあうる忠の氣象也
うる事きりところは船庭よりを梶取一人まひ
いでく中きりハ出るうとく中ハ思うぐうれ
東門ふあいりうつところまて放すてを諸将
乃初しかしせ給ふそのをとうく へ志川め海



志ほも川をわたりしぎの呂ふゆくは見い
いつき海底うこのうらにめされうつ上らう城
思うおんの思ひうけやさま為ろとそん忍う
中を申しくしやきんにかきけずくいは人太
此事一人のゆ人ふそくそこの者大が擬分
の志ふ探せん事しを不便の次第みそはんへぜ
うの上らうを海へ志川めさてまつり百余人
のいのちを信しすけあまとも海つくをまし
よりゐさけあさ田舎人の変なまいり我命
やたすうるんとおりひ庭うこの内へまいり

こやどころをかくらうりひきわたしや
あまりはまづ紀の善しき披見まゐらせすゑぞ
申さるゝ人へもうしへしげめまゐらせを頼さ
ゆゑはなはちぎりかくれ去使はちさへあが
まよふせ給ひてこやとやるんぞうもやるん
とひとりうらまもせ給へとあくらうり
かきいゝさや海へしげめ表らせんと色雅
の御事ふるまりては俗の御言葉はあつ頼さ
なまきは候やしはしゑをを申させまゐれは

はあら浪のうらみは仏の法力ありとうみん
さらにうせ給ひね　あまたとして僧の一人彼
船(せん)ちうよりしらなみうたりしをひん〳〵かう
法華まきては提婆達(だいばだつ)品と申す南方むかくせ
うかいの龍女をとけ仏の果(くわ)をとけさる者也く
非人えまのくさいあうのたむけをほうく
へこれは提婆品すくるは讀して龍神あらう
らくふそうんむ事にこそ怨霊(をんりやう)のいのりとなる
うすかさくらんとうさくせいしけまはまいら
ゑきれかいそ　きうすゝ給ひてやまをもしつを船

座(ざしき)へあからうしまつけはけり　はしは僧此儀
まいつくいの一経せよとて　船中(せんちう)の上下一向(かう)
同音(どうおん)に観音乃ごをうがうをとなへ志ふかうしき
すりのとものか海(かい)上ふうらひいそとくそくんく
ふきもう先一遍まさいあうのしちやうかなう
舟門をかいひとくと彼のと見えてうらうせれを
沢彼こてあまはあし毛(け)のこまより白鷺(さぎ)ゑ
八人乃さ給りかうつくと彼のと見えて打うせ
ね座しあそらく大將のうらまそてきう切く
さんまりしそさのたけふん次拍そし此雅(ゑひ)

慈みまいらせてのち源氏あさはきけるかなる
よのりゆんはえりまた関ゝのくまゝの弁れ
おかきをあけ海つゝかみよみむかへとまま
しとやの孫ひく勿ゝのそゝみそりはけゝ
稚児ともかあまた源氏てみさ源をしみみよ
かしこの見ゆるハ陸奥の事までみてもき八
いろさ海哉又かかんつきやうとこそそんしり人
屯志ゝしをはらんせむかゝあよ小舟一そう
あらへ人かと源一人わひそへ此上らうをの世
まいりせうすこの上ふつきまかしいうふとこる

源中納言せよとや此儀むつかへしとて小船一
そうゑむき押うし主一人ともやまとこん
そのを乗うせさそうりうずのまきあふすさ
のうへみそうち危まつ　枝さうりをそく思う
ふいうんさむりをふされてきかんのうまへ
よ志関ゝ志をそまさハ人すむ鴻のまはさらまう
かゝさをありぬ危し光ハうしゆを鴻ふもう
けゝくゝうゝとのすこのう人おとそふ陸奥れ
う哉志川ゝ志か瀬ふめく家々のあそれきゝし
年ん事こそかうしけま　さまは静かの思

なお中々をさけられきつかや風俄にふき
まけて松浦の船を西坂さしてふきまよゆくと
かへしまゝ一乃たにのおきよりてむこ山おろし
ましまさるまゝゆきうらしまれこそひしろ
けさらうみを坂ろ川のほしてそこれみる川と
うんとうやをなすこうせ　静まけれ息在れ
は船はむしまたはつせ路ひとり　この時と
やれはりするあまのりへあつてへすむ人を
あれひまなくて成わし乃屋のうきふしおけ
さすこか乃うちをそいまゝそてまろりきん

はゝ五月のなかうせに清あろそよりけたく
いうせしきのひね　花城こそあら隠ぬきのま
乃子たまてもあはいふしこそま日らんと
身けきかみ志んて　はうかふふそくきるく
しておうしいきおさせ給ひきり　御志ふ
うきいのち乃をまくふこゝをせくみうきめ
をうん幸よと打けう拐給人とうひそるさ
さうてたふなくこのかろは雑きうはくまも
なりれ折りかうまとまよりつ志門をおうひそれ
いそふうさく係なきの法也きくをあうそふ



ふぜいなり　山川まてうくてみ為さそ去依
乃さうとやゝれんいふこうへをくりてをもあき
うしと打まひ給へそあまたやきつゝあわれく
まそいわくしき海しまする上らうをとまゝしう
みまにのせ中きかく去给を色なくり吾らんに
いうかう清をまりふそてを人のむそいとりや変
もはなきふゆあくかきのふますきまし　をやり
けまは　ちうなきよを川あくの立着よ浅そそ
城志かり仏く今年いあくゆくくうさうせ給ふ
清あろ乃うらこそあるきまうのまゝ　さてそも一礼

宗光やうの御事をはりてかうせ給ふ
院宣をきこし給ふ息子の御むかひに武文京へ
のぼりまいらせしのち日月もかはらぬまにせ
給ふと承りたる君をもさう孫たいふりう夷め下せ
あひねかうて志川ころろすく御供申して京
よりくだりまゐらせしに御すう孫ありけるは
こやまとところは去年の九月に鼓城清うら
ましくてもさへそろせ給ひしとこそ
なりかはりしうやまゐらせさせていみち
またくまむかひまゐらせし文世とうかせ給ふ

たまされくちりろのそこみをも嘆ぬかうと
志川ころろすく御ひ京門らりせさまひまいり
為兼の御まひてよらひまいらせしとも中門よ
との升して宇都山の事ともなうくりまゐら
なりそりありのうまいらせ梅を去年の九月
小阿波乃ゐるを我をきて当国へまうりし
ときさふ身かうありうさうきね我とりて見
志りはい川くしかり給うその上暴書の人に
志やうそくとは見てもあまをいりさ御さん里
院宣ホ乃上らう女房うちの内すかへ下らせ

給ふとてうんぶうよおもひてうしへ志川ませ
さまひころその志ゆうそくまてそまるんわミ
おゝ遣さよ分とくいひさゝすゝ琺ゝやかさ
こしまてまこし先ゝ去年の九月九日しミ
らえりしその梅ゝ濤ゆゝをまらんとあゝ路
えとなくれ那しめしをきわいまゝさおゝは指
てゆいまとおかせきれえいろさゝそんして
えゝもまさゝしふかとそとりゝせて来ゝせ
わゝり宮はくくと御覧せらゝてよ浩息所
乃御むゝひふ武文家への分せられしどき

西弁乃宗見ゝ補進やせし給きねなりゝみしまで
歴とてさらのいわゝゝきわをとめし剃しさゝし
あはせて給らんせらゝてふおやのをんすて
志をゝゝい給給くきたま任　るゝふ此浩うさ
うひ乃おゝ為きなま浅宮二图吉御覧せさ代
きわをはうかふをし指分ひるゝゝ志川ませ給
へて

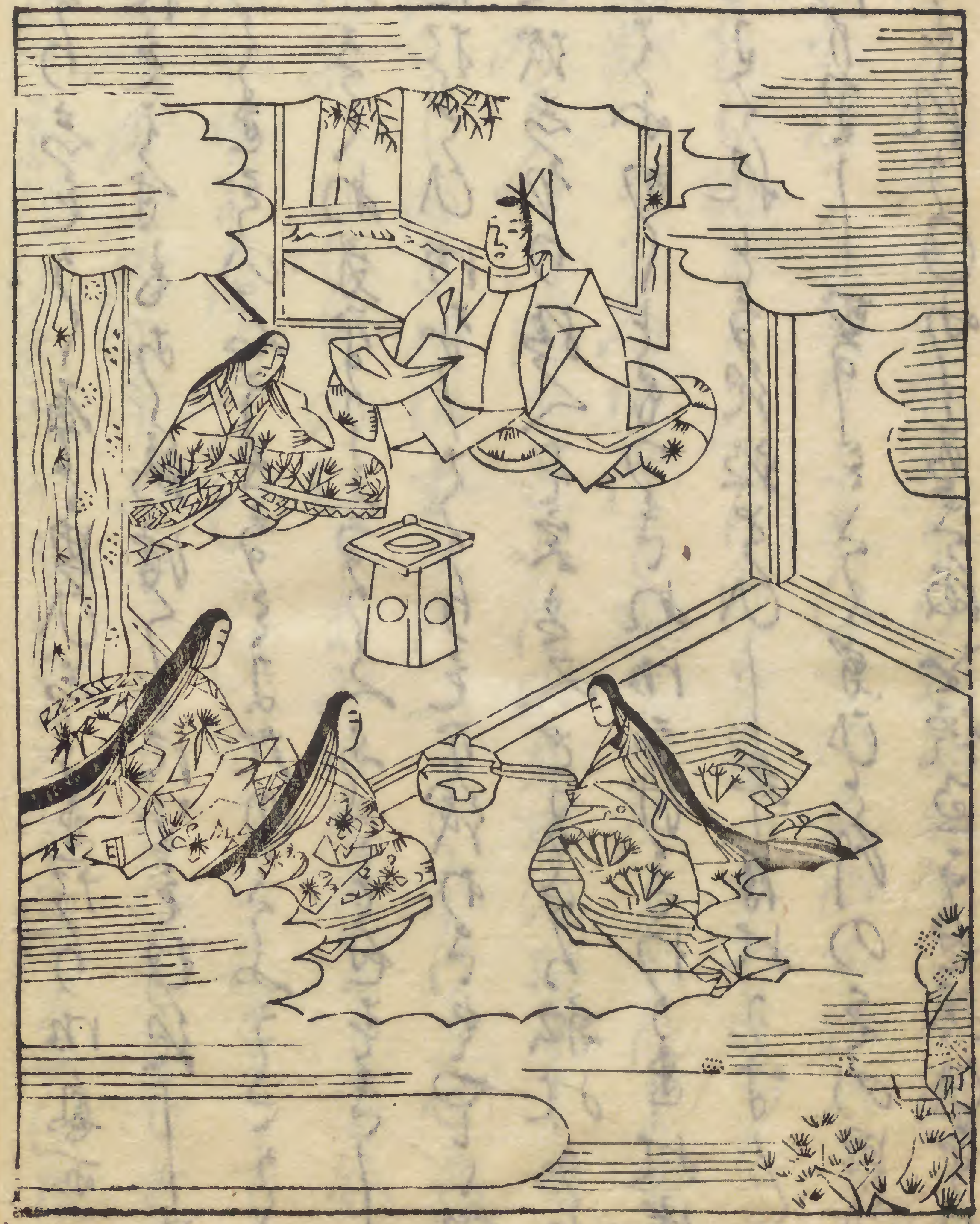
おり升も法おありさづけひしかなきごと
ねさへてまうり三ころやまどころ水今いさや
此世の御はしまする人とは法の御ぼしめされ
まつのきねのうぢのうりりし月をきうさ人ぬき
みちにさらあられそうし治給ありえして色
玄乃ゆうまい武京の民の女あらびにたさ此
武文とうりに三界の善海をかすく御のよ九乃
の志母うせらりに武士をいのら世往ふそあれ
まうのつ　さつびてに是年よ見諸國よりうさ
おい川て六波羅鎌倉九國に西のてうてき月

時よりかゝるひとゝてしかは先帝(せんてい)をさきたて國より
をこかんとするかことまひ一の家は亡ひれたるさき
よりもおもかはりかゝりける給ふたてまつらくと
平家(へいけ)一とうの御代(みよ)を滅めくたしとはゆせた
一のみやの清らかなる御恵みの御事一世に
れもし海さぬれは車(くるま)かくなけかせ給ひ
志ふおそちのむしまに御座まよしと風れ
たよりなけ給むかひ殊そのさまうくて給
よへ給ふ共まかさつか山よりかけれそくて世れ
まつこよりひ身去かうちよりかくさまきひ横見

かり志もうく座と思ひ志りまたりは息女にわ
おもてをすもおう給清くしにをそむ紀し清
あくまての御うきすゝまたゆくふうこうさ
乃きこね身なるうつゝ人ふさとせまきし
猶おもひはなしきうりをなほわさをやしは
誰彼志かり給へた家をとさまうか紅れうら
のさふかくともつきねはうけきわりまれ中
乃まうれとすれ給をひし年月れうすく
はりまし思すくう身ひとの川のきの思ひ
まされうそつゆしまさ海を得色さう世給ひきり

かくてうつほしまのなかつのときこれ海に引
う人人間のゑいぐわを天上のけらくきはめを
と云月日をおくりされといふ歳をおくり
長生殿(ちやうせいでん)のうちには春をとゞめのあしたにくれを
ゐかゝす不老(らう)門の海人にはやうやう九つのせ
えことをかさねけふを千年のたのしめとめく
たきたのしにありしそのさま弥ひまり





大日本帝國圖書之印
日本政府圖書
內閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan